



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	アーノルト・シェーンベルク オペラ 《モーセとアロン》：集合体という人格の表象 合唱による表現の可能性
Author(s)	阿久津, 三香子; AKUTSU, Mikako
Citation	
Issue Date	2017-04-21T04:56:14Z
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3013">http://hdl.handle.net/10723/3013</a>
Rights	

アーノルト・シェーンベルク オペラ《モーセとアロン》：  
集合体という人格の表象——合唱による表現の可能性——  
論文要旨

Opera *Moses und Aron* of Arnold Schoenberg: representation of a character  
as the mass——possibility of the expression by a chorus——

明治学院大学大学院文学研究科提出  
博士論文

A Dissertation Presented to the Division of Arts and Letters,  
Graduate School of Meiji Gakuin University,  
for the Degree of Doctor of Art Studies.

阿久津三香子  
AKUTSU Mikako

2016年9月28日  
28th September, 2016

Approved by  
望月京  
MOCHIZUKI Misato

アーノルト・シェーンベルク Arnold Schönberg (1874~1951) のオペラ《モーセとアロン Moses und Aron》は、1930年春頃からオペラとしての作曲が開始されたと推定される。曲全体が十二音技法によって書かれ、オペラ・テキストは全3幕構成。しかし、1932年3月、第2幕の作曲が終えられた後、第3幕の作曲は進まず、未完に終わっている。

シェーンベルクは、後年、アルバン・ベルク Alban Berg (1885~1935) 宛の手紙の中で、旧約聖書におけるモーセを題材とした作品への着想を得たのは、早くも1923年頃であった、と記している。そして、この着想が、カンタータ《燃える茨の傍らのモーセ Moses am brennenden Dornbusch》からオラトリオ《モーセとアロン Moses und Aron》を経て、最終的にはオペラ《モーセとアロン》へと至るのである。

1920年代後半、この時期はシェーンベルクの第3回ベルリン居住期にあたる。この時代にはすでに、鉄道や電話はもちろん、ラジオ放送や飛行機など、科学技術の目覚ましい発展により、人々の実生活そのものも、そこで聞かれる音響も急速に変化していた。このような時代を背景に、新たな技術を駆使した映画や、当時の平凡な市民の日常生活を描く「ツァイトオーバーZeitoper」が流行する。つまり、聴衆の趣味嗜好も変化していったのであり、また、製作者・創作者が好むか好まざるかはともかく、大勢の聴衆を惹きつけ得る内容(=彼らの生活圏の音楽や日常生活そのもの)を盛り込んだ作品が、多く提供されることとなっていた。

このような時代の風潮のなかで、シェーンベルクは「モーセ」という古から伝わる人物を題材として創作に取り組み続け、テキストだけでも膨大な手書き草稿やタイプ原稿を残している。そして、オラトリオからオペラへの改訂の過程で、テキストには多くの変更が加えられた。

オペラ《モーセとアロン》は、そのタイトルから想像され得る宗教的な内容と十二音技法の使用により、シェーンベルクのユダヤ的思想との関連や、モーセとアロンの補完的役割、ライトモチーフの有無、音列操作などに焦点を当てた先行研究が多く存在する。

これらの先行研究においても、オペラ《モーセとアロン》における「民」について、いくつかの興味深い指摘はなされている。

例を挙げるなら、パメラ・C・ホワイト Pamela C. White は、博士論文において、オペラ《モーセとアロン》における合唱は、決して第三者的に語ることなく、冒頭の茨パートを除き、絶えず民を演じている、と指摘している。

また、マイケル・チャーリン Michael Cherlin は、やはり博士論文のなかで、このオペラにおける民は、2つの基本的アスペクトで描かれているとし、これを「個々人の集合 a collection of individuals」と「集合的な大衆 a collective mass」と言い表している。

しかし、オペラに登場する民(以下、オペラの民)、民役を担う合唱に焦点をあてた研究、とりわけ、成立過程でのテキスト内容の変遷における民の役割の変化や、オペラの民と、シェーンベルクと同時代の民衆との関連を問う研究は、未だ不十分である。

以上を踏まえ、本論では、ユダヤ的思想との関連や音列分析、ライトモチーフ研究からは距離を置き、敢えて、オペラにおける名もない民に焦点を当てることとした。

はたして、オペラ《モーセとアロン》の民は、旧約聖書「出エジプト記」で伝えらる教訓的意義や神の偉大さを説教する上で役立つよう、描かれるべくして描かれた民であるのか。

「出エジプト記」は、旧約聖書中のモーセ五書（「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」）の一つであり、主に召命されたモーセによって導かれたイスラエル人のエジプト脱出を伝える物語である。「出エジプト記」で伝えられる、モーセの召命、十戒、黄金の仔牛など、多くの要素が、オペラ《モーセとアロン》においても採用されている。

しかし、「出エジプト記」においては、民の言葉や心理状態に触れられている箇所は多くはない。これに対し、本オペラでは、シェーンベルクによって独自に構想された、民を中心に繰り広げられる場面が挿入されている。

オペラで描かれる民は、会衆としてモーセとアロンの言葉をただ復唱するのでもなく、大団円を歌い上げるのでもなく、モーセとアロン、さらには神にすら、常に疑念を抱き、不満や希望を自ら訴える人々である。彼らは、「出エジプト記」で伝えられる民（以下、聖書の民）とは、異質なものとして映る。

オペラ《モーセとアロン》は、カンタータ、オラトリオという変遷を辿り、最終的に、オペラとして創作されるに至った。本格的なテキスト原稿が完成された叙事的な楽種としてのオラトリオから、舞台作品としてのオペラへの変遷過程で、民の位置づけ、役割は変化をとげたのだろうか。

この舞台作品がオラトリオからオペラへと改訂される過程に着目し、民の性格の変遷、オペラにおける民の属性を明確化し、オペラの民に映し出される時世の在り様を提示することが、本論のねらいである

本論は、II部構成となっている。

第I部では、オペラ《モーセとアロン》第1幕第4場で叫ばれる、民のシュプレヒシュティンメに含まれるテキストとの関連性を探るべく、19世紀末から20世紀初頭に、ドイツ、オーストリアの労働者合唱団で歌われていた合唱曲の歌詞に焦点をあてる。

第1章において、19世紀後半のウィーンおよびニーダーエスターライヒ州における、労働者合唱運動を概観し、若きシェーンベルクの労働者合唱団での合唱長活動と歌唱作品について論じる。

第2章では、以下の2つの資料をもとに、合唱曲の歌詞内容と傾向を整理・分析する。

一つは、「労働者歌唱協会メードリング Arbeiter-Gesang-Verein Mödling」が加盟していた「ニーダーエスターライヒ労働者歌唱協会連合 Verband der Arbeiter-Gesangvereine Nieder-Österreich」が開催していた、「ニーダーエスターライヒ労働者歌唱協会連合連盟

祭 Verband der Arbeiter-Gesangvereine Nieder-Österreich, Bundesfest」の予告プログラムに掲載された合唱曲である。

もう一つは、ベルリンで 1929 年に「ドイツ労働者歌い手連盟 Deutscher Arbeiter-Sängerbund」(1908 年設立) が会員用に出版した、『ドイツ労働者歌い手連盟 無伴奏男声合唱曲集 Deutscher Arbeiter-Sängerbund Männerchöre ohne Begleitung』である。この曲集には、連盟芸術顧問であるアルフレート・グットマン Alfred Guttman (1873 ~ 没年不明) から依頼を受けて、シェーンベルクが作曲した、「幸福 Glück」も掲載されている。

第 I 部での調査・整理に鑑みると、シェーンベルクが居を構えた 2 つの都市において、少なくとも、彼と接点をもつ労働者合唱協会や連合・連盟で歌われていた合唱曲の歌詞内容には、共通のテーマがあったとみることができる。その共通のテーマこそが、「束縛から自由へ」である。すなわち、「自由」は、当時の労働者合唱に関わっていた人々にとってのある種の標語としてまかり通っていたと言えよう。

若い頃、労働者合唱団を指導する立場にあったシェーンベルクは、大勢の労働者たちが一堂に会し、大合唱を行っていることを、身をもって知っていた。これを踏まえると、彼も、労働者合唱運動における共通のテーマや標語を認識していたと判断できる。

加えて、労働者合唱で歌われていた合唱曲のテキストに見られる、「自由」や「鎖を打ち砕け」という言葉は、オペラ《モーセとアロン》第 1 幕第 4 場における民のシュプレヒシュティンメのテキスト「すべては自由のために！鎖を打ち砕け！Alles für die Freiheit! Laßt uns die Ketten zerbrechen!」と恐るべき一致を見せているのである。

これらの考察を踏まえて、オペラの民のシュプレヒシュティンメは、19 世紀末から 20 世紀初頭に「束縛から自由へ」と歌っていた労働者たちの声と重なって響き得ること、そして、それゆえにこそ、オペラ《モーセとアロン》の民は、聖書の民とは違和感のある存在として映るとの解釈が提示される。

第 II 部は、オペラ《モーセとアロン》の成立過程、テキストの変遷と音楽の分析・考察にあてられる。これらの分析・考察は、オラトリオ・テキスト、オペラ・テキストにおける、民の性格の変遷、民の属性を詳らかにすることを目指して進められる。

先ず、第 1 章では、オペラ《モーセとアロン》の創作期と重なる、シェーンベルクの第 3 期ベルリン時代に、彼が置かれていた状況を概観する。第 2 章において、カンタータからオペラ作曲へと至る過程を辿るとともに、オラトリオからオペラへの構想変更に、オペラ創作への内的欲求だけではない、外的な要因が絡んでいた可能性を提示する。

第 II 部の大部分を占める第 3 章は 2 節からなる。

劇内容の変遷を扱う第 1 節は、さらに、3 つの項に分けられる。

第 i 項では、旧約聖書、特に「出エジプト記」とオペラ・テキストとの比較を通じ、聖書とオペラ・テキストの異同、特に、双方の民の差異が提示される。

第 ii 項は、オラトリオ・タイプ原稿（資料 TC）とオペラ・タイプ原稿（資料 TK1）の

照合にあてられる。双方のテキスト照合を通じて、オラトリオからオペラへの変遷過程で、民の性格が明確化され、徹底的に像を否定するモーセの属性が確立されていったことを示す。

第 iii 項において、オペラの民の属性を提示するとともに、その属性がいかにして確立され得たのかを併せて考察する。その際、シェーンベルク所蔵図書であるギュスターヴ・ル・ボン Gustave Le Bon (1841~1931) の著作、『群衆心理 *Psychologie des foules*』（ドイツ語訳：*Psychologie der Massen*）との比較を試みる。この比較からは、シェーンベルクによるオペラの民に関するテキストとル・ボンの著書『群衆心理』で論じられている記述に、いくつかの類似点があることが提示される。

第 II 部第 3 章第 2 節は、音楽分析にあてられる。音楽分析は、オペラ《モーセとアロン》第 1 幕の合唱および民と関連付けられる箇所を中心に進められる。

本節も 3 つの項で構成される。

第 i 項では、オペラ《モーセとアロン》で使用される音列の特徴を簡潔に述べる。

第 ii 項では、作曲の初期段階に書き込まれたスケッチ資料も参照し、本オペラにおける民と神のつながりが、音楽的にいかに表象されているかを分析・考察する。

第 iii 項では、第 II 部第 3 章第 1 節で提示されたオペラの民の属性が、音楽的にも表象されているかを分析・考察する。

第 II 部において、オペラの民の性格付けの変遷、オペラの民の属性が、明確に提示される。オペラの民は、第 1 幕第 1 場において、「選ばれた民」として定義づけられ、これにより、本作品が旧約聖書を下敷きとしていることが、より強く印象付けられこととなった。

しかし他方では、民の詳しい状況の説明の欠如、不特定の時間・空間という設定により、オペラの物語は、受け手に、枠にとらわれない様々な解釈の可能性をも提供しているのである。

しかも、シェーンベルクが独自に構想し、組み込んだ場面の多くは、「出エジプト記」の当該箇所では全く触れられることのない、個々人の意見や感情、心理状態の揺らぎによって構成されている。

このように捉え直すと、シェーンベルクによる聖書の書き換えや独自の構想は、オペラにおける民の存在、民の属性と密接に関連しているとみることができる。

オラトリオ・タイプ原稿（資料 TC）とオペラ・タイプ原稿（資料 TK1）の照合からは、オペラの民の性格とその役割は、オラトリオからオペラへの変遷過程で、綿密に練られ、変更され、明確化されていったことが分かる。

オラトリオ・タイプ原稿においても、民役を担う合唱は、伝聞から想像し、新たな神を信じたり批判したりする。しかし、オペラ・タイプ原稿において、民は、主体的に意見を述べながらも、感覚的で、論理性や客観的根拠をもつことのない心理変化の激しい存在として、その性格が、一層鮮明に描き出されることとなった。

オペラの民の属性、民と像の関係の源泉を探求する上で、シェーンベルクの所蔵図書で

ある、ル・ボンの著作『群衆心理』の存在は興味深い。

ル・ボンが述べているように、オペラ《モーセとアロン》における民にとって、像こそが、彼らの言動の動機となっているのである。

本オペラにおける像の多用は、オペラにおける民の属性と深く関連し得る。そして、民をいかにして描くか、民の属性をいかなるものとするかという問いに直面した際、シェーンベルクが、ル・ボンの『群衆心理』を一助とした、もしくはそれ以上に参照した可能性すらが指摘される。

第II部での音楽分析から、オペラの音楽は、音列分割や音色の変化などを用いることで、民の心理状態を繊細に描き出しているとみることができる。他の声部へと受け継がれ、模倣され、全体へと広がり行くテクスチュアを作り出す対位法を、心理状態や行為が個から集団へと感染し、広がっていく様を表象する際に採用するという選択は適切であろう。

本論での考察を踏まえると、オペラ《モーセとアロン》に描かれた民が、旧約聖書の教訓的意義や神の偉大さを説教する上で役立つように、描かれるべくして描かれた民とは異質の存在に映ることは、不思議ではなくなる。

オペラ《モーセとアロン》の民には様々な属性が重ねられ、彼らは、容易に「誰」と限定的に特定し得る存在ではなくなっている。シェーンベルクは、オペラの民にこのような多義性・多層性を与えながら、個々人の多様性や心理状態の揺らぎ、感情の高揚と無批判な信心、そして没个性的な総体化までを、テキストと音楽によって描き出した。オペラの民には、主体的に発言し始めた個々人が、時々刻々と一元的に組み替えられ、1つの集合体へと変貌していくこととなるシェーンベルクの生きた時代の様相すらも、映し出される。

シェーンベルクは、歌唱とシュプレッヒシュティンメ、二重合唱をはじめとする合唱のグループ分け、対位法の使用など、合唱の表現の可能性を探り、活用しながら、人々の集合体がもち得る性格を巧みに描き出した。そしてこれを通じ、彼は、旧約聖書を下敷きとして創作された自身のオペラを、時代や地域を超えて聴衆に受容される作品とすることに成功したのである。